



江戸花火

山手樹一郎



江戸花火

昭和三十九年九月二十日 印刷
昭和三十九年九月三十日 発行

定価 三四〇円

著者 山手樹一郎
発行者 豊島清史
印刷者 菅生定祥

発行所 株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(291)〇二三八番
振替東京 五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

六郷の渡し
 凄い執念
 煩惱の犬
 鈴ヶ森
 毒虫稼業
 呆れた話
 尻拭い
 つけてきた男
 辻斬り魔
 桜餅の店
 馬鹿になる
 千羽鶴の印籠
 支度金百両

一五七
 一五六
 一五五
 一五四
 一五三
 一五二
 一五一
 一五〇
 一四九
 一四八
 一四七
 一四六
 一四五

凄い女

一三四

兄の敵

一四三

盗人談義

一五二

横恋慕

一六二

死なばもろとも

一七二

縛られたまま

一八三

助かる道

一九一

お菊の慾

二〇三

どろんこ中間

二二三

救いの手

二三三

木のぼり

二三四

こわれた人形

二四三

罪ほろぼし

二五三

装
幀

吉
田

善
彦

江戸花火

六郷の渡し

江戸家老中橋頼母たのもから、内密に至急出府しゅつぷさせるようにという書状が届いたとかで、御用部屋へ呼び出されて内命をうけた杉村源吾は、その日のうちに浜松を立つてきた。

御用部屋でもどんな用があるのかは全く見当がつかないそうで、

「とにかく、いそいで行つてみてくれ」

と、いいつけるだけだった。

どうもあんまり気持ちのいい話ではない。せつかくいそいで江戸へ到着したとたんに、

「源吾、まかり出たか、その方儀ほうぎこれこれによつて切腹申しつける」

と、いきなり詰腹を切らされても、禄を食はんでいる家来の身であつて見れば、なんともいたし方

のないことなのだ。

もつとも腹を切らされるような悪いことをしたおぼえは、絶対にない。

——しかし、世の中には讒言ざんげんということもあるからなあ。

そんなことも考えてみたが、讒言ざんげんというやつはおおむね人の妬みねた、憎しみから生じるものだ。源吾は人に妬まれるほど秀才でもないし、また出世もしていない。どつちかといえぼのんびりと育っているほうで、あまり小才のきくほうではないから、世渡りという点からいえば、いつも損ばかりしている。そんな存在は決して人の邪魔にならないから、憎まれるはずもないだろう。ただ一度、七年ほど前にこんなことがあつて、あつと人をびつくりさせたことがある。

浜松の若殿新九郎信之のぶゆきは力自慢で、相撲すもうが好きだつた。近習きんじゅうたちは誰もかなわない。いや、誰も勝つ氣がないから、いつも勝つのは若殿ときまつていた。それを馬鹿ばかつ正直な源吾は、三番挑戦されて三番とも快勝した。

「源吾、わしは主人だぞ。一番ぐらいは花を持たせろ、たわけめ」

若殿は口惜しまぎれに源吾を叱りつけた。

「申訳まことございません。ついつかりしました。こんどはきつと花を持たせます」

「馬鹿、花というものは黙もくつて持たせるから花になる。ことわつて花を持たせるのは追従ついしやうだぞ。怪

しからんことをいう奴だ」

その後若殿は自分で相撲をとらなくなつてしまつた。そのかわり近習たちをけしかけては、源吾に相撲をとらせる。源吾はいつも相手に花を持たせて、一度も勝つたことがない。とうとう若殿もあきらめて、相撲はやらせなくなつた。

十八ぐらゐの時で、それからもう六、七年にもなる。若殿新九郎はその後間もなく江戸の上屋敷へ入つて、ずっと江戸暮しだが、

——まさか七年もたつて、その時のことがまた口惜くやしくなるはずもないだらうしな。

と、源吾は思うのである。

結局思いあたらぬままに、まあよからう、どうせ江戸へ着いてみればいやでもわかることなんだからと、源吾はもう余計なことは考えないことにして、道中をいそいだ。

浜松から江戸へは六十五里、ほぼ七日の道中である。

その道中も今日は最後の行程へ入つて、藤沢から江戸へ十二里あまり、藤沢を立つたのが少しおそかつたので、七里歩いて川崎の宿しゆくへ入るころちようど暮六つを打出していた。

——はてな、しまい舟に間にあうかな。

川崎の宿を出外れたところに六郷の渡しがある。表街道の渡しは関所と同様、明六つにはじまつ

て暮六つにしまうのが定法だ。このしまい舟に乗りおけると、今夜は川崎泊りにしなければなら
ない。

もつともしまい舟は乗りおくれる人たちのために、多少待つていてくれるのが常識になつて
いるが、それにしてもそう気がついたのがちよつとおそすぎたので、源吾が渡し場へ駈けつけた時は、
すでにしまい舟は川の中流へかかつて行くところだつた。

「やれやれ、おそかりし由良之助どころじゃない。こいつは六日のあやめ十日の菊ということにな
つてしまつたぞ」

源吾ががっかりして、うらめしそうにしまい舟を見送つてみると、御同様のうつかり者はほかに
もあると見えて、あかるい月あかりの土手をいそいで河原へ駈けおりてくる男女の二人づれがある。
先に立つているのが女で、うしろから駈けているのが男だ。男のほうが足弱で、しまい舟におく
れてしまつたのかも知れない。

「あら、やつぱり間にあわなかつたじゃないか、浅吉」

女の尖つた声とがが男を叱りつけるようにいいながら、それでも駈けるのをやめずに渡し場まできて
立つたのは、余つほどあきらめかねるものがあるのだらう。

年ごろ二十一、二とも見える娘で、娘というには少し年増になりすぎているが、粹いさな下町好みで

なかなか利かなそうな、普通の町家娘とはどこか違うところがあるようだ。

供についているのは、人入れ稼業の子分とも見える旅支度で、長脇差をさした二十五、六の、顔はちよつととぼけているが、がつしりとした体つきの男だ。

「お前たちも六日のあやめ組になつてしまつたようだな」

源吾がわらいながら声をかけると、娘は強い目でちらつとこつちを見て、

「いいえ、この浅吉がいけないんです。あたしがいそがなければ間にあわないよと、何度もいつたのに、なあに、しまい舟はゆつくり待つていてくれるもんだからと、——どうするつもりだえ、浅」

と、口惜しそうに浅吉を睨みつける。

「すみません、元締。ここのしまい舟は少しせつかちすぎるんです。——お武家さんも六日のあやめ組なんですか」

浅吉は娘の風あたりをさけるように、わざと源吾のほうへ話しかけてきた。

「うむ、残念ながら十日の菊組ということになつた」

「なめるほど、元締は名をお菊さんと申しやしてね、はじめから十日組には縁の深い人にできているんでさ」

「ぶん殴るよ、浅。あわを喰つて育つのは鯉の子ばかりだと、人をさんざん冷かして、お前がこんな十日の菊にしまつたんじゃないか」

お菊という娘元締は本当に腹を立てているようである。

「申訳ありやせん。正直んとこ、ここの渡しのしまい舟がこんなに薄情だとは気がつかなくつたもんだから」

浅吉はまだそんな負け惜しみをいつている。

「泳いでわたるには、もう、少し水が冷たいだらうしな」

源吾も未練がましくまだそこを立ち去りかねていた。

「お武家さんも江戸へおいそぎになるんですか」

お菊が気をかえたように話しかけてきた。

「うむ、藩命で至急出府するようにいつけられているんだ。お前も今夜中にどうしても江戸へ帰らなければならぬのか」

「ええ、明日は十五日で、諸家さまの御登城日ですもの」

「そういえば、お前は人入れ稼業の元締のようだな。女でもあの稼業はできるのか」

「しようがありません。阿父つあんが怪我をして寝ているもんですから、その間だけ名代をつとめ

「ているんです」

「そうか、娘の身で感心なもんだなあ」

「本当は女のくせに飛んだ跳つかえりだと、呆れておいでなさるくせに」

お菊は人見知りをしない顔つきで、くすりとわらつて見せる。人入れ稼業はあらくれ人足をあつかう稼業なのだから、年増だけにこの娘は相当しつかり者なのだろう。

「しかし、どうする、ここを泳いでわたる勇氣があるかね」

「よします。風邪を引いたつてつまりません。十一日の菊になるつもりで、今夜はここへ泊つて、明日の朝早立ちにします。お武家さんは——」

「しようがない、わしも七日のあやめとあきらめて、今夜は川崎泊りにしよう」

「じゃ、御いっしよに宿を取りましょうか」

「残されあやめと残され菊の相宿か。よからう、これもなにかの縁だろう」

「元締——」

そつぽを向いていた浅吉が急に呼んで、

「そいつは少し人見知りをしなさすぎやしませんか」

と、咎めるように口を出す。

「どうしてだえ、浅」

「相手は見ず知らずの若いお武家さんですぜ。夜半^{よなか}になつて、おれのいうことをきくと、刀なんか抜かれたらどうしやす」

空つとぼけた顔をして、当人の前でぬけぬけとそんなことがいえるのだから、これも性根^{しょうこん}は相当な男らしい。

「お前はいつもそんなくだらしないことしか考えられないのかえ、馬鹿だねえ」

お菊はてんで頭から相手にもせず、

「お武家さん、まいりましょうか」

と、わらいながら肩をならべてきた。

「お武家さん、くだらないことをいつてすんません。あつしはこれで苦勞性なもので、つい余計な心配がしたくなるんです」

浅吉は平氣でのこのこと後からついてくる。

「お前はなかなか忠義者のようだな」

源吾は苦わらいをしているよりしようがない。